

静脩

1986年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 22, No. 2

英国におけるライブラリ・ネットワーク

三 浦 勝 利

1. はじめに

J. C. グレイ (J. C. Gray) はネットワークサービスを次の4つに分けている。

- ①相互貸借により文献を提供するもの
- ②書誌データを提供するもの
- ③複数の利用者とコンピュータ・データベースをリンクすることにより、抄録索引情報を利用させようとする高度に組織化されたもの
- ④文献そのものではなく、文献中の特定の情報を提供するもの

イギリスでは全国を9地区に分け、早くから第①パターンの図書館ネットワークは形成されており、地域別に活発な活動を行っている。その中で、電算機によるネットワークを形成している地区として、次の5地区をあげることができる。

- ①スコットランド地区 (SCOLCAP)
- ②ヨークシャー地区 (BLLD)
- ③バーミンガム地区 (BLCMP)
- ④ブリストル地区 (SWALCAP)
- ⑤ロンドンと南東部地区 (LASER)

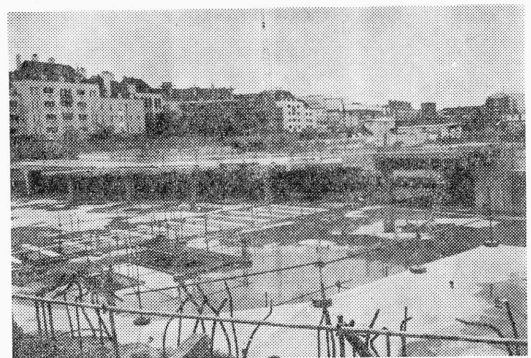
この他に全国レベルのシステムとして英国図書館 (The British Library) の提供する BLAISE (British Library Automated Information Service) がある。

筆者は昭和60年3月から9月にかけて、イギリ

スに滞在し、上記ネットワークシステム利用館や電算機センターを訪問し、システムアナリストやユーザーと懇談する機会を得たので、その概要を紹介したい。

2. 英国図書館書誌サービス局の提供するサービス

イギリスでは1972年まで①大英博物館図書館、②国立科学発明図書館、③国立中央図書館、④国立科学技術貸出図書館および⑤英国全国書誌出版業務として別々に活動を行ってきたものを統合し、独立した機関とする案が上院に提出され、同年7月ブリティッシュライブラリー法として成立した。従って現在でも建物は従来のものを利用しているため、ロンドン地区でも10数ヶ所に分散し



— 工事中の英国図書館建築現場 —

ている。これを1ヶ所に統合するための新館建築は数年前からすすめられており、1990年にはその一部が完成するとのことである。

現在英国図書館は大きく分けて参考局、貸出局、書誌サービス局および研究開発部に分けられるが、ここでは書誌データ作成・頒布サービスを行っている書誌サービス局について簡単に触れてみたい。

1974年8月、英国全国書誌出版業務と法定納本局を統合し、書誌サービス局が発足した。その目的は①カレントな資料の目録を作成し、提供することにより、重複レコード作成の手間をなくす、②印刷体あるいは機械可読形式でのデータ提供により、遡及検索を可能にする、③ローカル目録の提供により各館に対し、ファイルの構築、レコード処理および目録作成サービスを行う、である。この書誌サービス局が利用者に提供するサービス BLAISE は1977年4月に始まり、現在では英国だけでなくヨーロッパ各地で利用されている。

BLAISE の提供するサービスには次のようなものがある。

BLAISE - LINE :

1) 目録サービス

AACR 2 に準拠したレコードの提供

2) 発注/受入サービス

英国内で出版される図書は出版の2ヶ月前に情報が入手できるので、その CIP データを使つての発注処理

3) 情報検索サービス

BLAISE - LINK :

アメリカ国立医学図書館の提供する医学関係17のデータベース検索で、現在では直接国立医学図書館のデータベースを検索できる。

BLAISE - LOCAS :

1974年に導入されたもので、図書館の目録を出力する機能を備えた、完全な目録サービスシステムであり、各館では UK および LC/MARC の利用の他に、BLAISE にないデータは独自に作成し、管理することができる。

BLAISE - CORTEX :

図書館サービスをサポートするマイクロコン

ピュータ・ソフトウェアシステムであり、ハードウェア(Sirius マイクロコンピュータ)とソフトウェアの双方を提供するものである。

3. 地域ネットワークシステム

オンラインネットワークの特徴として、①参加館グループ内での合意と、これに基づく特定の作業課題を実行する何らかの方針がある。②コンピュータと通信技術によって、データベースにアクセスする直接的な利益が受けられる、③直接、間接の投資額が少なくないので、投資に見合う利益をネットワークサービスから得られる、④一般的に参加館の内部組織の変更はネットワークの効果を最大限に生かすために必要である、⑤参加館はすべてネットワークに関して合意していること等があげられる。

ここでは紙面の関係で、英国における代表的な地域ネットワークシステムである SCOLCAP と SWALCAP について簡単に紹介したい。

3.1. スコットランド図書館協同機械化計画

SCOLCAP (Scottish Libraries Co-operative Automation Project)

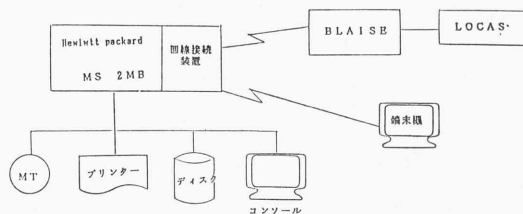


図 1

1970年代の初め、スコットランド国立図書館では図書館の機械化と、それによってもたらされる図書館間相互協力に対する効果について独自に調査を始め、1973年、同地区の図書館関係者を招いて会合を開き、電算機による共同目録の可能性について調査を行うための作業部会を設置したが、SCOLCAP の始まりだといえる。

このシステムは最初から目録作成に重点を置いたもので、①スコットランド地区における書誌情報オンラインネットワークの構築、②オリジナルメンバー館(6館)における機械化の実施、③同地区の他の図書館へのサービスの拡張、④英国図

書館を中心とした、全国ネットワークシステムの一環として、同地区のセンター館となることを目指している。中でも SCOLCAP データベースにない資料の検索は自動的に BLAISE に切り替わるのが、このシステムの特徴であるといえる。

目録検索画面

C00	CATALOGUING (ENQUIRY)	
Option	—	
Database ?	1	1 - Scolcap only 2 - Scolcap and Blaise
Control No.	_____	
Order No.	_____	
Search Term 1	_____	
Search Term 2	_____	

図 2

目録サブシステムの機能の概要

- 1) 目録作成：目録データの修正、削除および新規データの追加
- 2) コントロール番号の変更：目録データ中に存在するデータをコピーする際に使う機能で、先づ全体をコピーし、コントロール番号を修正することにより、新たなデータとする機能
- 3) MARC 変換：SCOLCAP あるいは BLAISE にあるレコードのデータを作成する際、コントロール番号のみを入力し、目録を作成する機能で、遡及変換によく使われる
- 4) ローカルデータ修正：すでに作成している目録のローカルデータを修正あるいは削除する機能
- 5) その他、大量に目録をとり込む機能、図書の配架状況を入力する機能、参加館に典拠ファイルを使用させる機能等があるが、現時点では稼動していない。

納本図書館の1つである国立スコットランド図書館を中心としたこのシステムは、完成された受入、目録サービスを提供するとともに、現在の参加館20館（大学、公共および専門図書館を含む）から40館を目標に、サービス範囲の拡大に向け準備をすすめている。

備をすすめている。

3.2. 南西部図書館協同機械化計画

SWALCAP (South West Academic Libraries Co-operative Automation Project)

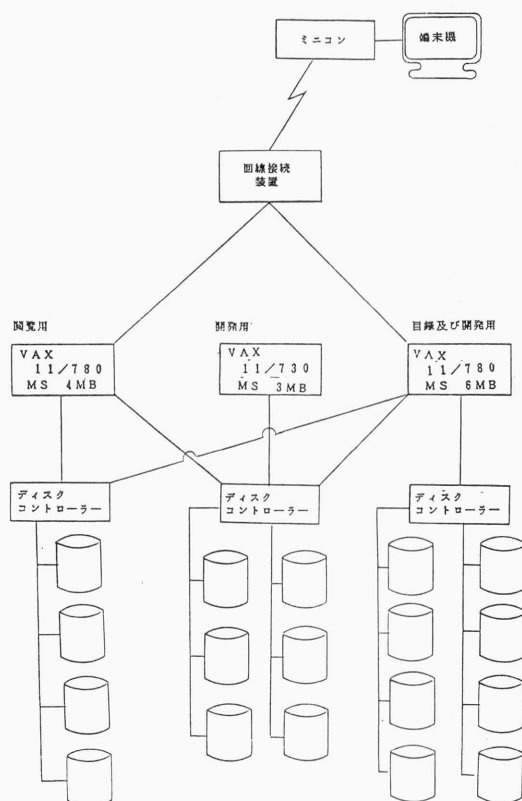


図 3

ブリストル大学を中心とした1969年英国図書館の資金援助を得て設立された SWALCAP は図書館ハウスキーピング業務のための統合された機械化サービスを目指し、1976年からサービス開始、1981年運用業務を、1983年目録システムのレベルアップを行った。

SWALCAP では 現在稼動中のシステムとは別に、スタンドアロンシステムと称し、次の機能を有する単一システムを開発中である。

- ① 閲覧システム
- ② 目録システム
- ③ 受入システム
- ④ 雑誌管理システム

⑤検索システム

この新システムは、今まで業務別にファイルを維持していたのに反し、書誌データはすべての業務からアクセスできるよう一つの目録ファイルとしている。

SWALCAP では、参加館に端末機だけでなく、ミニコンも配置しているが、センター側にも同様なミニコンを置き、システム開発、障害対策等に前向きに取り組んでいる。また、参加館の規模や、必要とする機能に応じたシステムを作成提供するので、参加館では、次のような要素を考慮し、費用に応じてハードウェアを選定できる。

- ①所蔵タイトルの量（複本は除く）
- ②蔵書数（複本を含む）
- ③年間貸出冊数
- ④利用者数
- ⑤年間受入冊数（複本を除く）

現在参加館23館、約400台の端末をサポートしているが、上述のスタンドアロンシステムの完成は1986年6月の予定であり、徐々に新システムに移行するものと思われる。

4. おわりに

このような地域ネットワークとは別に、ロンドン大学では、全学約60の部局図書館の機械化を調整する委員会(LRCC: Library Resources Co-or-

minating Committee)を設置し、きめ細かな計画のもとに電算化を行っている。また公共図書館でもいくつかの分館を包括した独自システムを構築しているところがある。

英国における図書館業務機械化の特徴は、大学、公共および専門の各図書館が同一システムに参加し、地域ネットワークを形成していること、PSS (Packet Switching Services) による全国通信網が発達しており、広範囲にわたるネットワーク形成が可能であること、またネットワークによる機械化の長所(①各館で電算機をもつ必要がない、②共同システムなら1年以内に導入できる、③システム設計、プログラミングを行う必要がない、④電算機の専門家を配置する必要がない、等々)を最大限に生かすため、北米で開発されたシステム、例えば GEAC, OCLC や ALS (Automated Library System) を導入している館が少なくない。

今回、大学、公共、専門および私立の各図書館を逐一訪問し、機械化の現状を調査し、我が国での東京大学文献情報センターを中心とした全国図書館ネットワーク形成の早期実現を痛感するとともに、このような機会を与えて下さった関係者各位に深く感謝する次第である。

(附属図書館学術情報掛長)

第5回国際医学図書館会議ひらかれる

日本大学会館を会場として開催された、第5回国際医学図書館会議を記すには、先ず、国際会議について、当初から現在までの経過をお話ししておく必要があるであろう。

医学の進展と共に急増の途をたどっている医学情報は、近年の研究活動の成果はもとより、広く関連諸科学をも積極的にとり入れ、益々高度化し専門分化されつつある。その膨大な情報量と、多様化してゆく情報活動に、医学図書館として、的確かつ迅速に対応してゆくためには、国際的な協力活動を維持してゆくことが不可欠な問題であること等、医学の発展に即した図書館機能や、図書館職員の向上その他、関連の諸問題を検討し解決

してゆくことを目的として開催されることになった。

1953年(昭和28年)にロンドンにおいて第1回会議が開催された。これは、世界で初めての医学図書館員の会議であった。世界第二次大戦終了後間もなくの開催であったが、我が国からの2名の出席者も含め、33カ国、約300名が参加し、57にのぼる研究発表がおこなわれている。

第2回は1963年(昭和33年)にワシントンで開催された。日本からも「書誌学目的のための機械利用」について発表される等、来るべき情報化時代は、この会議の発表論文の中で、すでに予言されていたようである。